

活動発足の経緯

1996年4月に、関西地区の土木技術者有志によりシビル・ベテランズ & ボランティアズ(CVV)が構想され、以降5年間にわたって構想から自発的な活動に徐々に発展してきている。CVVは字義のごとく、一線を引いた土木技術者が奉仕として土木事業に貢献することを目指しているが、後述するように、土木事業のおかれていた現在および将来の状況を切り開こうとする積極的な視点を内包している。理念・理想をもちながら現実には遅々たる歩みである。ここでは、その発足の経緯から現在の状況を紹介する。

土木学会関西支部では平成2年度(1990年)よりフォーラムシビルコスモス(FCC)の活動を行っている。シビルコスモス(Civil Cosmos, 土木学)の理念は河田恵昭氏(当時、京都大学防災研究所助教授、現、同教授・同巨大災害研究センター長)が土木学会全国大会(関西支部担当、平成3年度開催)のメインテーマとして提唱されたものである¹⁾。FCCでは、21世紀の土木界のあるべき姿を創造的に考えるとともに、土木に関わる情報の受信と発信の場として社会との係わりを模索してきている。日常的な議論を20歳台~40歳台の意欲的な土木技術者で構成されるFCCワーキンググループ(FCCW)が行い、年に数回、土木界の指導的な立場の方々で構成されるFCCメンバーによる議論・意見交換(フォーラム)を行っている。そこでの議論をFCCブックレットとして関西支部より公表している。筆者は平成5・6年度にFCCW代表幹事を務めた。

さて、平成7年度を最後にFCCW活動を引退した河田恵昭教授を含む数名のメンバーにより、前述のようにCVV活動が構想された。その背景は次のようなものである。

土木事業と土木技術者をとりまく時代背景

21世紀を迎えて、わが国は世界で最も高齢化の進んだ社会となり、今後もさらに生産年齢人口(15歳~64歳)の減る傾向が続き、社会活力の低下が危惧されている。また、このような人口動態の中で、戦後の高度成長期を経て安定成長期に入ったことは、わが国のおかれて

いる状況の特徴づけるものである。すなわち、先進西欧社会に比べて、いまだ社会基盤整備の遅れは歴然としており、高齢化社会・安定成長社会の中でその量と質を充実しなければならない。このように記すと、公共事業不要論の世論の中で、土木業界擁護論と受け取られかねないが、例えば、道路交通だけに眼を向けても、歩道も無いような道を車とすれ違いながら歩かざるを得ない日常生活の改善と、大規模災害時に活かさせる国土全体の交通ネットワークの整備に日々努力しなければならないのがわが国の状況である。これは、大学で学生を叱咤激励するときに、自ら意識していることである。

さて、社会基盤を支える土木事業は、公共の利益を考慮する行政の計画と営利を目的とする企業活動によって実施されてきた。土木技術者はその行政あるいは企業の一員として社会に役立つ気概をもってその役割を果たしてきたが、遅ればせながら、わが国も成熟社会へと向かう過程において、市民生活者としての主体性が求められている。すなわち、土木技術者が従来の組織の枠を越えて、社会基盤整備において一社会人として責任ある行動をとるよう求められている。1999年5月に土木学会で制定された「土木技術者の倫理規定」の示す一つの方向でもある。このような活動の連携によって、いまの土木界の抱える多くの社会的な問題の新たな展開が期待される。

前述のように土木事業は組織単位に行われ、その構成員である土木技術者個人はほとんど表に出ないシステムとなっている。土木構造物が“無名碑”²⁾といわれる由縁である。その土木技術者は定年退職後、突然個人に戻ってしまう。そして、組織的なケアは皆無に近い状態となり、土木技術者として高度の能力を発揮できる場がなくなる。高い見識のもと、生活者の視点から社会基盤整備に貢献するシビル・ベテランズとして活動できるのではないだろうか。

土木学会は、組織を担う現役の土木技術者を対象としてほとんどの事業を展開してきた。学会とはそもそも会員のボランティア活動によって支えられるのが筋であり、組織によってではない。したがって、これからの学会において、もっと個人としての活動を活性化する場が求められよう。

シビル・ベテランズ & ボランティアズの構想

以上の状況のなかで、土木学の専門の技術と知見を活用して、地域コミュニティに必要な社会基盤整備のあり方を助言し、また生活支援ボランティアとして行動する土木技術者（Civil Veterans & Volunteers：CVV）の役割と活動の可能性について模索してきている。さらに、地域コミュニティ間を連結する広域のネットワークを構成して、活力のある成熟社会の創造およびその持続的発展に貢献する途についても検討することになっている。これらの構想の概要を「CVVの構想」として図-1に示す³⁾。

アンケート調査とフォーラム

われわれの構想を退職土木技術者に示し、このようなシビル・ベテランズ & ボランティアズの活動に対する意見を調べる目的で1998年8月にアンケートを実施した。対象者は関西在住の約1000余名である。アンケート回収率は26%でそれほど高くないが、回答された方の内、80%余の方がCVV活動に興味があると応えられたことに、われわれは意を強くした。また、回答された方の内、約30%弱の方が何らかのボランティア活動に参加されており、その割合は一般に比べて非常に高い。さらに、興味深いのは自由記述意見であり、CVVに対する多角的な見方が表明されているが、これはわれわれのそれまでの議論においてもそうであった。すなわち、コンサルティング的活動から、ボランティア指向あるい

はサロンのな場を求める意見まで幅が広い。CVV活動では、そのような多様性を許容し、各人の持ち味を生かせる方が必要である。

このアンケート調査をもとに、このような活動に興味をもつ方々に集まっていただき、生の声を聞かせていただくフォーラムを次のように実施した。

フォーラム「もう一肌ぬぎませんか？

- シビル・ベテランズ登場への期待 -

日時：1998年10月3日（土）14:00～17:00

場所：阪神・淡路大震災復興支援館フェニックスプラザ

参加者：50名（内、ベテランズ30名、幹事メンバー20名）

具体的活動

前述のように、CVVフォーラムに約30名のベテランズが参加され、具体的な活動を待たれていることより、1999年1月末にさらに発足会を開催し、当面「まちづくり」、「アドバイス」および「防災」の3グループで活動を開始した。その後も毎年1月末の時期にCVV総会を開催し、活動の節目としている。

なお、ベテランズおよび幹事メンバーの意見交換にマルチメディアの利用が不可欠であり、特に電子メールの利用を推進し、また、われわれの活動を紹介するホームページを立ち上げている。

<http://www.civil.eng.osaka-u.ac.jp/cvv/>

本稿を契機に他の地域にも同種の活動が展開され、さらにネットワークが広がることを期待したい。

参考文献

- 1 - 河田恵昭：土木学に向かって、土木学会誌1月号，pp.6-9，1991
- 2 - 曾野綾子：無名碑，講談社，1969
- 3 - 河田恵昭：国土防災の適性水準（Acceptable Risk）を考える，土木学会誌1月号付録，平成10年度全国大会報告，pp.119-122，1999

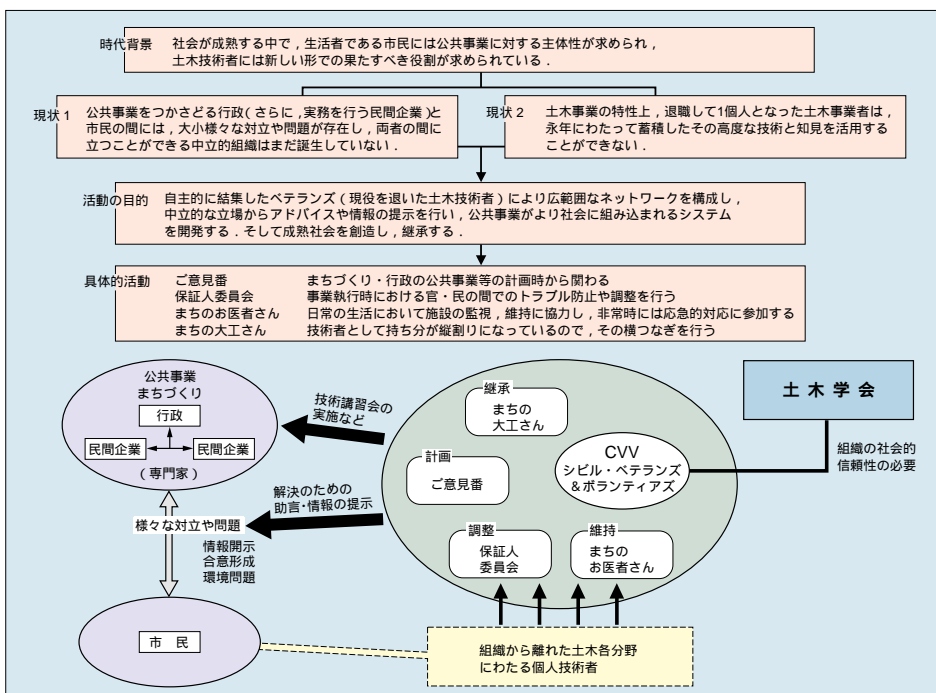


図-1 シビル・ベテランズ & ボランティアズ (CVV) の構想³⁾